

## 日独シンポジウム「上演芸術としての映画」を開催



ボン大学 ラインハルト・ツェルナー教授

初日には、欧州における日本文化の発信拠点であるケルン日本文化会館において、早稲田大学 小松弘教授による日本初期映画についての基調講演、活動写真弁士 片岡一郎氏による語りおよびピアノ伴奏を伴った『瀧の白糸』(溝口健二監督)の上演が行われ、大変好評を博しました。また、本シンポジウムには、本学、ボン大学および韓国・高麗大学が実施する日独韓共同修士プログラム (TEACH) の学生も参加しました。



シンポジウム会場 (ボン市)

2013年11月29日(金)から12月1日(日)まで、ドイツ連邦共和国ボン市及びケルン市にて、全学交流協定校であり、本学と活発な研究交流・留学生交流を行っているボン大学、そして国際交流基金との共催により、シンポジウム「上演芸術としての映画—初期映画・映画館史の日独比較」を開催しました。



活動写真弁士 片岡一郎氏

シンポジウム2日目、3日目には、「映像と語り」などの7つのセッションにおいて、ボン大学ツェルナー教授を始めとする計14名の日独を代表する映画研究者が、日独の映画説明者(弁士)、幻燈(ラテルナ・マジカ)などのそれぞれのテーマについて発表を行い、国際研究フォーラム「日独比較映画史」の可能性を議論しました。

このように、本シンポジウムは、日本文化紹介、日独比較映画史研究において、重要かつ革新的なものとなりました。